

2014年5月4日 主日礼拝説教（要約）

聖書 ルカによる福音書4章31～37節

説教「権威のある言葉」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

主イエスのガリラヤ伝道の拠点となったのは、カファルナウムというガリラヤ湖西北岸にある町でした。故郷ナザレの町での主イエスの宣教は人々のつまずきと反発を引き起こしましたが、ここカファルナウムでは、主イエスの御言葉は多くの人々を捕え、豊かな実りをもたらしました。主イエスの語られる教えは力強く、いのちにあふれていました。「人々はその教えに非常に驚いた。その言葉には権威があったからである」（32節）とあります。主イエスがどんな話をされたのか、その内容については何も記されていません。けれども、聖書が読まれ、そこで約束されていた神の救いの御業が、今ここで実現していることを告げられたに違いありません。単にその話しぶりが雄弁だったとか、分かりやすかったというのではなく、その言葉には聞く人々を捕え動かさずにはおかない権威がありました。

ある安息日の礼拝でのことです。「会堂に、汚れた悪霊に取りつかれた男がいて、大声で叫んだ。『ああ、ナザレのイエス、かまわないでくれ。我々を滅ぼしに来たのか。正体は分かっている。神の聖者だ。イエスが、『黙れ。この人から出て行け』とお叱りになると、悪霊はその男を人々の中に投げ倒し、何の傷も負わずに出て行った」（33～35節）。

「汚れた悪霊」に取りつかれた人というのは、どんな症状あるいは状態の人であったのかはよく分かりません。当時、原因のわからない病気とか、医者や薬によって癒せない症状を、人々は悪霊によるものと考えたようです。また、聖書の中にベルゼブルとかベリアルという名があるように、当時の世界には霊どもが悪の王国を作って世を支配し、人間を苦しめていると考える風潮もありました。けれども、ここに書かれていることは、確かに当時の人々の考え方や言葉によって記されていますが、起こった事柄は主イエスの言葉が権威をもって、悪しき力から一人の人を解放されたという出来事です。

ここで興味のあることは、悪霊に捕えられていた人が誰よりも先に主イエスの言葉に反応しているということです。この人は会堂にいました。それは、主イエスの御言葉と力強い働きに心惹かれ、救いを渴望していたのではないのでしょうか。癒されたい、救われたいと思っていたのです。しかし同時に、救いを願うこの人を捕えていた悪霊は、主イエスに捕えられてはなるものかと激しく抵抗し、「かまわないでくれ」と叫ぶのです。

主イエスが来られたところで引き起こされた激しい叫びと呻きは、私たちの中にも生じるものではないのでしょうか。一方で主イエスを求め、救いを求め、神に立ち帰ることを願いながら、他方で自分は所詮汚れており、救われがたい者である。だから、放っておいてほしい。面倒なことはしたくないし、ややこしいことになりたくない。この叫び

は、私たちも同じように持っているやっかいで複雑な心のさまを映し出しているのではないのでしょうか。

しかし、主イエスはこのように抵抗し叫びをあげる人に対して真剣に関わり、悪霊を叱りつけ追い出してくださいました。悪霊はその人を投げ倒したが、何の傷も負わずに出て行きました。主イエスがその人を守ってくださったのです。

汚れた悪霊とは、神の支配にさからう力、神の御心にそむく力、神の支配がはじまろうとすると抵抗する力、荒野で主イエスを繰り返し誘惑したあの悪魔的な力です。それらが私たちを支配し、暗闇に引きずり込もうとします。もちろん、今日私たちは古代の人たちのように悪霊とか汚れた霊といった言葉を用いたりはしません。けれども、この世界に、私たちが説明したり理解したり制御したりできない悪しき力が働いていて、私たちを引きずりまわしているということを否定できるのでしょうか。科学・技術・医学の恩恵にあずかって生活している私たちですが、わけの分からないものには振り回されていない、迷信や悪魔的な力からは自由であるとどれだけ言えるのでしょうか。ふだんの生活の中で、新聞やテレビを見、あるいはネットの世界を覗き込む中で、いったいどれだけ私たちは自分たちを振り回す闇の力を退け、無傷に生きてきたと言えるのでしょうか。また、この世界の各地ではテロや戦争が頻発し、人間の狂気と憎しみの連鎖が収まることなく続いているのです。

悪霊などという言葉ははやらないかもしれませんが。しかし、この世には時代の風が激しく吹き、時代精神という姿形をとった諸霊が私たちの生活と心の中に深く入り込んでいて、スマートな形で、私たちをうぬぼれさせ、突き落とし、不安にさせ、だまし、麻痺させ、狂わせるのです。私たちは、主イエスが祈るべきことを教えてくださったとき、最後に「われらを試みに合わせず、悪より救い出したまえ」と祈るように言われたことを忘れてはなりません。またパウロがエフェソ書の結びに、「悪魔の策略に対抗して立つことができるように、神の武具を身につけなさい。わたしたちの戦いは、血肉を相手とするものではなく、支配と権威、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊を相手にするものなのです」と勧告していることを忘れてはなりません。主イエスが生涯かけて戦ってくださったこの世にうごめく悪魔的な力を侮ってはなりません。

主イエスは、荒野の誘惑から始まる地上の生涯において、神のご支配に逆らう悪の力を誰よりも鋭く見抜き戦われたお方です。十字架の死も、復活も、それは人間を滅びに至らせる罪と悪の力に対する戦いと勝利でした。それゆえに、私たちはこの主イエス・キリストにつながっているところで、悪魔や悪霊という目には見えないが恐るべきリアルな敵と戦い、滅びを免れることができるのです。主イエス・キリストの御言葉が語られ聴かれているところで、私たちはたえず自分を取り戻し、自由と平安を取り戻していきたいのです。